



2000年上海出張中

確か六月だったと思うが、合格の連絡を受けた時、「これで私は勉強に専念できるんだ」と跳び上がって喜んだ。

石坂財団の奨学金をいただいたことで、その後の私の留学人生は変わった。私は早速弁当屋のバイトを辞め、上海の妻と娘を日本に呼び、学校近辺のアパートに入居し、昼夜を問わずに勉強と研究に没頭した。奨学生だった修士課程の二年間、私は水産学会誌に二報の論文を公表し、学会の全国大

会で三回口頭発表した。さらに中国で専門書を二冊出版した。奨学金のお陰で、非常に充実した二年間の研究生活が過ごせた。

その後、私は博士後期課程に進学し、研究を続け、他の奨学財団の援助もあり、一九九六年三月に、無事に博士号を取得した。

勉強の成果を仕事に応用

研究のテーマがかまぼこのゲル形成能のメカニズムであったので、大学院修了後、研究の成果を実践的に仕事に応用しようと考えた。そこで、蒲鉾*の老舗である鈴廣(本社・神奈川県小田原市)に入社した。

少々専門的になるが、畜肉や家禽肉と比べ、魚肉タンパク質は非常に面白い特性を持っている。あの蒲鉾のプリプリとした食感を出せるのは魚肉だけである。さらに魚の生息水温によってもタンパク質の性質が変わる。これらの特性を製品に活かすと、いろいろユニークな商品ができる。私はこの魚の特性に魅了されている。

小田原の高級蒲鉾の原料はグチという魚である。グチと言っても世界中五〇属二一〇種もあり、日本沿岸には九属一六種が生息している。また練り製品の主原料のタラは実は五五種もあり、同じ科の魚であっても性質が微妙に違う。私どもは世界中の魚

サンプルを入手し、それぞれのゲル形成能や味などのかまぼこ適性を調べている。それらの特性をうまく駆使し、より安心安全、より美味しいかまぼこをお客様に提供することを心掛けている。

最近、魚肉ペプチドの研究に力を入れている。魚肉ペプチドはさまざまな機能性があり、また植物性ペプチドや乳ペプチドに比べ、アミノ酸組成がより哺乳動物の筋肉に近い特徴があり、注目されている。私たちのチームはかまぼこの製造技術を活かし、天然の魚の筋肉だけからペプチドを作り、安全性を確認後、スポーツ団体や老人ホームに提供し、アスリートたちの筋肉増強、疲労回復効果、また低栄養リスクの高齢者の血中タンパク回復効果を測定してもらっている。近々、魚肉ペプチドの商品化後、さらに機能性の研究を進め、他素材との相乗効果を狙った商品の開発を目指していく。

かまぼこは日本の伝統食品であり、健康食品でもある。近年、欧米で魚食ブームが起き、かに風かまぼこが大人気である。

私は奨学金のお陰で勉強ができた。今は勉強の成果を商品開発に応用し、少しでも社会に還元し、人々の健康に貢献しようとする努力しているところである。

*漢字の「蒲鉾」は狭義的で、板付き蒲鉾を意味する。ひらがなの「かまぼこ」は広義的でどちらかというと、竹輪や揚げかまぼこも含む魚肉練り製品を意味している

奨学金が私の留学生活を変えた

国際文化教育交流財団一九九一年度奨学生。中国上海出身。一九八二年上海水産大学卒業。九六年北海道大学院水産学研究所博士後期課程修了(水産学博士)。同年鈴廣に入社。

鈴廣浦鉾本店研究開発センター長

万 建栄
まん けんえい

❖ 文革の試練をバネに留学

私の父は中国共産党の幹部だった。一九五〇年代の反右派闘争、六〇〜七〇年代の文化大革命で右派として批判され、失脚。当時の中国では、政治的「血統論」が流行っていた。迫害から家族を守るため、私の両親は離婚した。それでも迫害は免れなかった。その後、母は上海から福建省の山奥の工場に追いやられた。私も高校卒業後、上海郊外の島にある農場に送られ、そこで働かされた。子どものころから、ずっとぎりぎりの生活を強いられてきた。

激動的文化大革命が幕を閉じ、鄧小平氏が再び中国の政治舞台に登場した。彼の陰で、文革中、一年間廃止されていた大学の入試制度も復活した。この一年間高校を卒業した者たちは一斉に受験。私も農場から受験し、大学に入った。父の政治背

景の影響で、私は好きな文系には自由に行けず、水産に進学した。でも、人生は塞翁が馬、それゆえ、今の私がいる。

大学卒業後、国立水産研究所に入所し、研究をしていたが、もっと勉強したいと思うようになった。しかし、当時の中国には、水産科学分野の博士課程がなかった。日本は水産学研究所の先進国であり、やはり日本で勉強したいと考え、諸々の準備もあり、一九九〇年九月、妻と生後一カ月の長女を上海に残し、私費留学生として北海道大学へ入学した。単なる向学心ではなく、自由に勉強ができるチャンスを手放したくなかった。

❖ 奨学金のお陰で成果を出せた

私費留学生とは言え、当時の中国では給料が低く、家からの仕送りは不可能であった。北海道に到着後、学費や生活費を稼ぐ

●国際文化教育交流財団は、経団連第二代会長故石坂泰三氏の遺徳を記念し、一九七六年に設立された。これまでに、世界三カ国の大学・大学院へ一六八名の日本人留学生を派遣するとともに、世界四〇カ国四七八名の外国人留学生への奨学金の供与や講演会等を実施してきている。

ため、友人の紹介で、ある弁当屋に住み込みでバイトをすることにした。月曜から土曜は毎日朝五時からバイト、八時半から自転車で登校し、深夜まで勉強や実験を行っていた。さらに日曜日も休めず、一日一〇時間のバイトをしていた。石坂財団の奨学金をいただくまでの九カ月、休めたのはお正月の一日だけであった。

せっかく留学ができたのに、もっと勉強に専念したい。しかし、勉強や生活にはお金が必要であり、働かなければならない。数カ月後、私は学部の研究生課程を終え、大学院の修士課程に進学した。厳しい北海道の冬の寒さに加え、休めない体にも疲れが溜まった。「このままで続くのか？ 本当にやっていけるのか？」と不安と苦悩の毎日であった。

そのころ、学校の留学生係から国際文化教育交流財団(石坂財団)奨学金のことを知らされ、すぐ応募した。東京・大手町の経団連会館で面接を受けた時、自分の思いを面接官に一所懸命話していた。運が良く、